

舞踊創作における創作意図の数量的分析

朴 淳香
日本女子大学

本研究の目的は、ドイツ表現主義の流れに位置づけられるマリー・ヴィグマンの創作スケッチから、動きの構成に反映していると考えられる舞踊創作における意図を数量的に分析することを目的とする。数量的分析にあたっては、言語的な側面と図像的な側面からの資料整理にもとづいて動きの構成要素を抽出した。

データは質的データのため、分析の方法としては数量化理論第Ⅲ類とクラスター分析を用いた。得られた結果からは、ラバンのエフォートグラフ上の方向性が明らかに示され、ソリストと群舞の取り扱いが区別されていたことが明らかになった。

Quantitative Research on Choreographic Intuition of Dance

Junko Boku
Japan Women's University

This study is aimed to analyse the intention of dance creation statistically which is thought to be reflected in composition of actions from her creative sketches which is situated in the German Expressionism. In analysing statistically, I extracted some factors of actions based upon data adjustment from both linguistic and figurative sides.

As data was qualitative one, I used quantification theory type III and cluster analysis. As a result of my analysis, it was made clear that there was a direction of Effort Graf of Laban and that her treatments of solists and group dance were distinguished.

はじめに

舞踊作品を構成しているものは、人間の身体の情動をともなった動きである。作品を創る側も観る側も情動をともなった動く身体を介して作品の概念を認識している。作品の再現性ということを考えたとき、舞踊は一回性の芸術であるという特質から、動く身体によって構成されている舞踊作品の再現や保存は非常に難しいものとなっている。人間の身体の動きを記述する問題としては、ラバノーテーションなどの記譜法が開発されたが、音楽の楽譜に相当するものかというところではないだろう。音楽は楽譜を通じて作品の概念を分析することが可能であるという。しかし、身体部位がどのように有機的に動いているかを示すラバノーテーションでは、動きを分析的に解釈することを可能にしているが、作品の概念をとらえようとするとき情動面での情報が非常に欠落している。そこで、この情動面での情報を得るためには、創作者本人による何らかの形による記録や踊り手として作品に参加した人や観客として観たという経験のある人による証言が必要になってくるであろう。

今回研究対象とした創作スケッチは、ある一人の舞踊家が作品を創り上げていく過程で、骨組みとなるものを検討した内容を言葉や図によって書き留められたものである。このような創作スケッチは、舞踊作品を創作する人が決まって使用するものではなく、個人個人違ったやり方で創作に都合の良いものを取り入れているであろう。したがって、研究の方法や得られた結果は一般化できるものではなく、対象となる個人の創作意図を解釈するための判断材料でしかない。しかし舞踊作品に限らず、このように創作過程上に残した作品生成にかかわる資料は、創作意図を探ろうとする側にとってはこれまでも非常に興味の持たれるものであっただろうが、分析的に解釈する方法があいまいなためにあまり着手されていなかったのが現状であろう。

また今回研究対象としているマリー・ヴィグマン^{*1}は、文字による記録を多く残す人であったために、日記や書簡などが数多くみられる。創作の過程についての記述も多く見受けられるが、作品の構成要素としての身体の動きを記述したものというよりも、作品がどこから生成されるのかといったことを神秘的にとらえた創造論となっている。そして、作品に踊り手として参加した人や批評家は完成された作品を言葉という別の媒体で再現してはいるものの、創作意図の推察を可能にする組織化された動きを再現しているわけではない。また、創作スケッチは活動の後期ほど多く残されているが、理由として考えられるのは、加齢にともない自分自身の身体を動かして作品を創り上げていくというよりも机に向かって考えることが多くなっていたためではないかということである。このような状況を踏まえ、マリー・ヴィグマン活動後期における創作スケッチが、創作意図を反映しているであろうという想定のもとに数量的分析を試みる。

1.0 研究の目的

第1の目的は、マリー・ヴィグマン活動後期における創作スケッチから、分析方法の試みとして数量的に分析を行なうことである。また、第2の目的としてはエフォートグラフをスケールとした場合に動きの質的構成がどのような方向性を示しているのかを把握することにある。そして第3の目的として、作品ごとに構成された動きに違いがみられるのかどうか、またヴィグマンの作品は群舞に特徴があるといわれているが、群舞とそうでないソリストの動きに違いがみられるのかどうかを把握することとする。

^{*1} Mary Wigman, 1886-1973, Germany

2.0 研究の方法

2.1 創作スケッチについて

創作スケッチは、創作者没後にベルリンの芸術アカデミーにおいて所蔵されている。これらの一部分がDietrich Steinbeckの編集により1988年に出版された¹⁾。文献1)に掲載されている作品群は次の7作品(カッコ内は初演地と初演年)であるが、今回分析対象としているのは<2>から<5>までの4作品で文献に掲載されていないスケッチを転記したものを含める。

- <1> トーテンマル Das Totenmal (Muenchen, 1930)
- <2> サウル Saul (Mannheim, 1954)
- <3> カルミナブラーナ/カトゥリカルミナ
Carmina burana/ Catulli Carmina (Mannheim, 1955)
- <4> 春の祭典 Le Sacre du Printemps (Berlin, 1957)
- <5> アルチェステ Alkestis (Mannheim, 1958)
- <6> Klagemauer und Halbkreis (N., 1960)
- <7> オルフェオとエウリディーチェ Orpheus und Eurydike (Berlin, 1961)

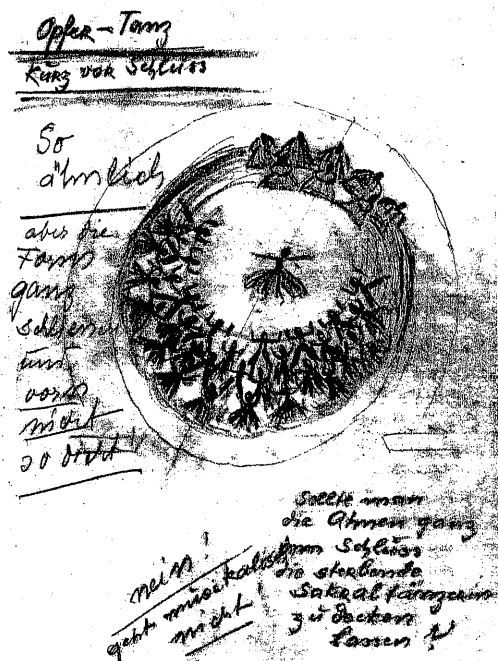


図1 作品<4>春の祭典のスケッチより

2.2 方法1

方法1では、作品<2>、<3>、<4>、<5>について創作スケッチの言語的側面からの分析を行う。文献1)に掲載されているスケッチと芸術アカデミーで転記したスケッチからの言葉をデータ化して数量化理論第Ⅲ類を適用する。創作スケッチに描かれている内容は、創作に重要なポイントとなる動きの組織化の過程の一部とスケッチ作成に必要な分類のための記号や名称、創作過程における創作者の心理的推移などである。データ化にあたっては、動きに関連のあるものはすべて抽出し最小単位化した。統計処理に必要なカテゴリーはラバン (Ludolf von Laban) のエフォートグラフを用いる。エフォートグラフとは、図1に示すように図式化して説明できるものであるが、スケールとして扱えるものではない。エフォートグラフで説明可能なことは、動きは時間 (Time)、空間 (Space)、重さ (Weight)、流れ (Flow) の4つの構成要素から成っており、相対的に相反する方向性を示すことができるということである。このグラフはスケールではないのでどこを分かれ目として扱うかが問題となるが、目安としては表1に示すとおり、いくつかの形容詞によって形容されるものに該当するかどうかということになる。

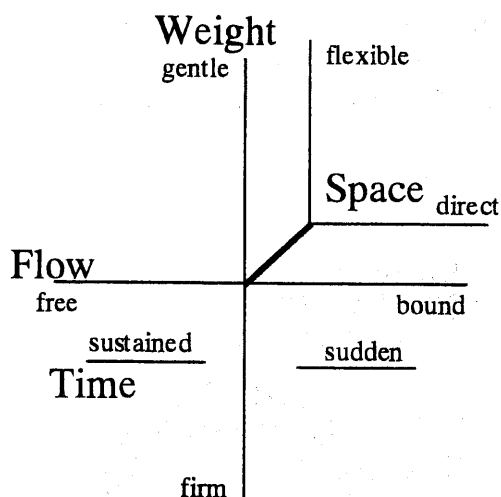


図2 エフォートグラフ

表1 エフォートグラフの要素

Weight	firm, strong	抵抗的な, 強力な
	gentle, light	デリケートな, 軽い, かすかな緊張をもった, 浮力のある
Space	direct	一直線の, 経路またはポイントにまっすぐに保つ
	flexible	遠回りの, 波打つ, 波動する, 造形的な, 横に外れた, 間接的な
Time	sudden	緊迫した, 鋭い, スタッカート的な, 興奮した, 瞬間的な
	sustained	遅い, スムーズな, リーグト, ひきのばされた, ためらう
Flow	bound	用心深い, 統制された, 抑制された, 止っている, 注意深い, 限定された
	free	淀みない, 統制されない, 抑えられない, 進んでいく, 全身での, ほとばしる

2.3 方法2

方法2では、創作スケッチの図像的側面からの分析を行う。文献1)に掲載されているスケッチから、人物の図像を群舞のグループごとにまたソリストは個々について最小単位としてデータ化してクラスター分析を行う。分類にあたっては、動きがある目的に向かって展開されていることを前提として、その目的に向かって積極的に動いているのかそうでないか（動的・静的）、また目的に対して収束的に完了しているのか拡散的に完了しているのかについて、展開の過程を動きの軌跡（直線的、曲線的、旋回的）も押さえながらカテゴリー（表2）を設定する。

表2 クラスター分析のためのカテゴリー

動・静の別	軌跡のタイプ	動きの完了
動的	旋回的	収束的
		拡散的
	曲線的	収束的
		拡散的
	直線的	収束的
		拡散的
静的	直線的可能性	収束的
		拡散的
	非直線的可能性	収束的
		拡散的

3.0 結果

3.1 方法1の結果

数量化理論Ⅲ類の結果をプロットしたものが図3～10である。これらのプロット図は個々にある傾向を示しているが、詳細はここでは省略する。全体的傾向としてはエフォートグラフという相反する性質のうち、グラフの右下半分の動き（直接的で重く抑制された）が関連が強く示された。

3.2 方法2の結果

クラスター分析の結果は下の図11に示す通りである。第3のクラスターまでを検討の範囲とするならば、ソリストの動きの中では最も検討課題の多かった作品4のソリストとその他のケースの区分が明らかであったこと。また、作品ごとにクラスター分析による区分が明確になってはいるが、4作品の中では作品3と5の内容が明確に区分されていないということが明らかになった。

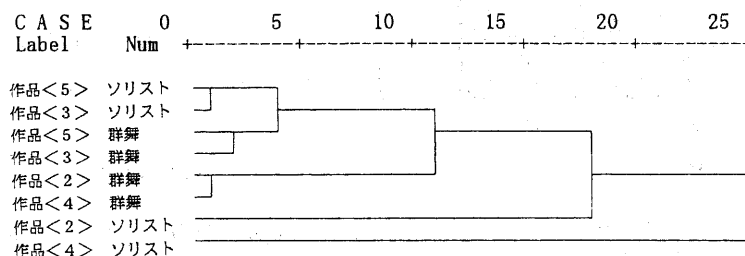


図11 作品2～5のソリスト・群舞のクラスター分析の結果

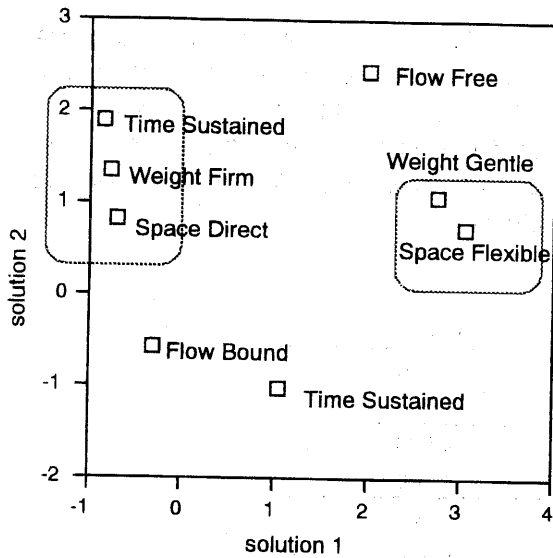


図3 作品<3>サウルのプロットその1

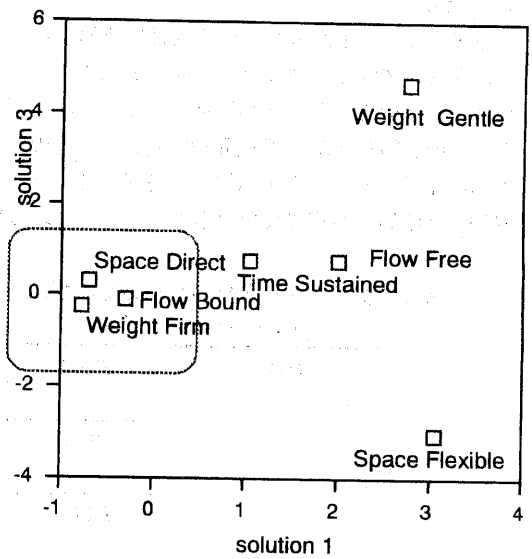


図4 作品<3>サウルのプロットその2

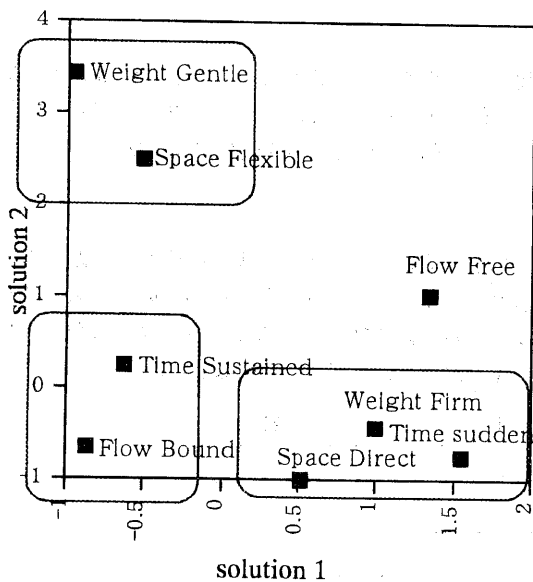


図5 作品<4>カルミナプラーナ／カトゥリカルミナのプロットその1

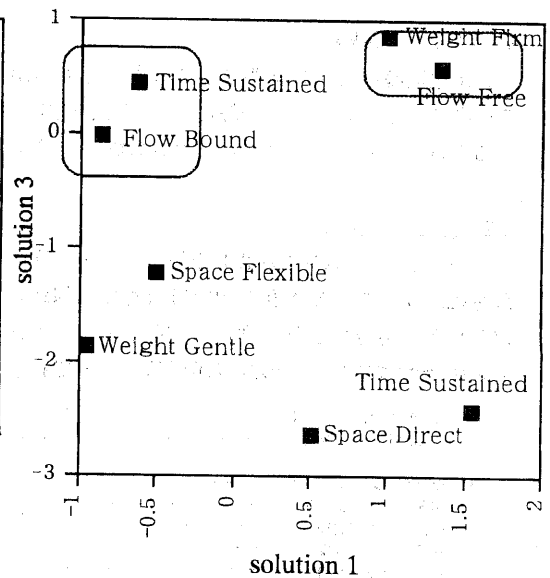


図6 作品<4>カルミナプラーナ／カトゥリカルミナのプロットその2

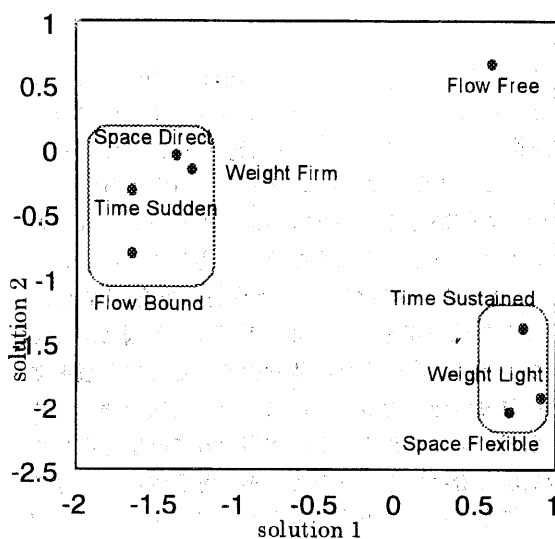


図7 作品<5>春の祭典のプロットその1

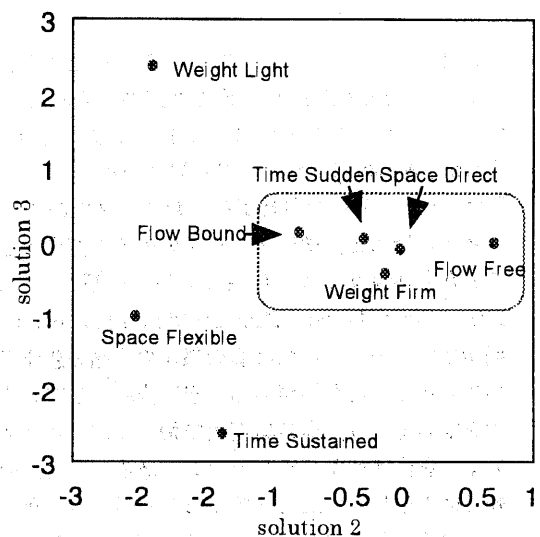


図8 作品<5>春の祭典のプロットその2

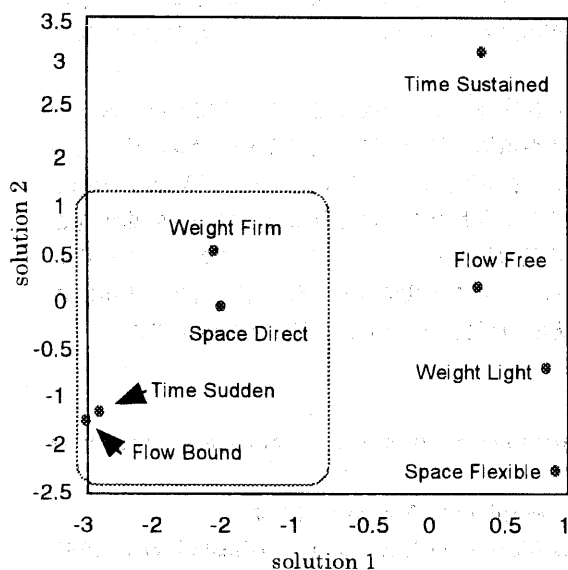


図9 作品<6>アルチェステのプロットその1

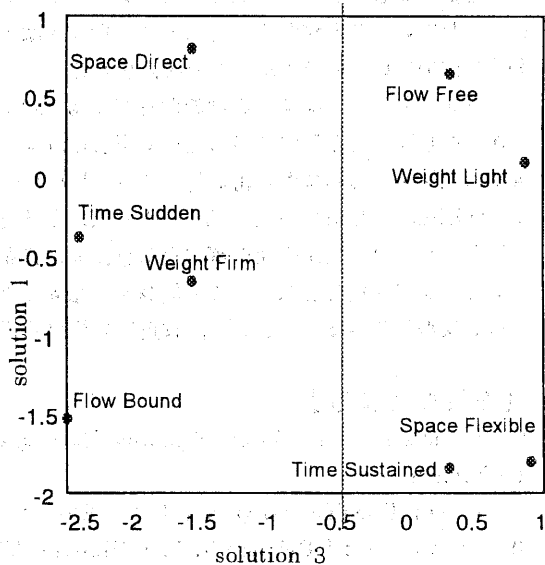


図10 作品<6>アルチェステのプロットその2

4.0 考察とまとめ

言語的側面を分析した結果から、作品<3>サウルは3つのエフォート (Space Direct, Flow Bound, Weight Firm) が強く関連づけられているところに特徴がある。作品<4>カルミナブラーナ/カトゥリカルミナは、作品<3>サウルと同様に3つのエフォート (Space Direct, Flow Bound, Weight Firm) に強く関連づけがみられたことに加え、2つのエフォート (Weight Firm, Flow Free) の結び付きがみられた。2つのエフォートの結び付きは、2つのエフォートが合成された動きの特徴と詳細にスケッチの内容を照合すると、ダイナミックな回転技術を多用しているということから説明がつく。作品<5>春の祭典は、エフォートグラフの4つの右下半分の動き (Weight Firm, Space Direct, Time Sudden, Flow Bound) の最も強い関連づけが2つのプロット図によって明示されている。これは春の祭典の作品の創作意図が、音楽の内容通りに舞踊化することに主眼を置いていたことと関係がある。音楽作品としての内容は豊穡の神に対していけにえとして娘を捧げるまでを描いており、春の雰囲気が始まるがいけにえの儀式に向けて急テンポの重層な音で終始一貫している。創作者もクライマックスであるいけにえの儀式から着手しているので、創作意図は右下半分の動きに集中していたと判断することができるだろう。作品<6>アルチェステも、エフォートグラフの4つの右下半分の動き (Weight Firm, Space Direct, Time Sudden, Flow Bound) に強い関連づけがみられた。この作品に関しても音楽の内容を舞踊化する試みで進められており、内容そのものの雰囲気が右下半分の動きが中心となる作品であった。

図像的側面を分析した結果から、作品<5>春の祭典のソリストの動きと他の動きが第1のクラスターとして区別されている。これはさらにすすめてスケッチの内容と照合すると、否定的な言葉を用いて創作過程がうまく進んでいないことを伝える記述から、他の動きに比べて創作意図が定まるまでにかかなりの時間的な経過があったのではないかと考えられる。これは必ずしも他の動きとの違いを区別するクラスターの結果を説明できるものではないかもしれないが、この点に着目してさらに詳細な分析を進める必要がある結果である。第2、第3のクラスターからはソリストと群舞の違いが数量的に示されていることが明らかとなった。創作者は群舞の取り扱いについてソリストに対応する関係で創作を進めていたのではないかと考えられる。

エフォートグラフは4つの要素から成る相対的に相反する2つの方向性を示すものである。人間の身体の動きは、ある目的を持っている場合には4つの要素はそれぞれに相反するものではなく、同じ質や方向性をはらみながら組織化される。したがって、右下半分の4つのエフォート (Weight Firm, Space Direct, Time Sudden, Flow Bound) が浮き彫りにされたことは、結果として予想の範囲内ともいえるが、いく人かの研究者による創作者の舞踊作品の特徴とも一致しており、このような一致をみることができたことは、一つの興味深い結果である。このことは完全ではない創作スケッチが創作意図を反映しているものとして、数量的分析が分析方法の可能性を示すことができたからである。

【主要参考文献】

- 1) Steinbeck, D. ed., Mary Wigmans Choreographisches Skizzenbuch, Herausgeber Akademie der Kuenste, 1987
- 2) Laban, Rudolf & Lawrence, F. C. EFFORT, Macdonald & Evans, 1974
- 3) Laban, Rudolf Revised by Lisa Ullmann, The Mastery of Movement, Northcote house, 1980
- 4) Mueller, Hedwig, Mary Wigman Leben und Werk der Grossen Taenzerin, BELTZ Quadriga, 1986